

## 多摩川改修の時代（1916～1930）その10

### 《土方たちの大喧嘩（けんか）・・鶴見騒擾事件》

関東大震災は、工場が、東京市及びその近郊から、多摩川流域や京浜臨海造成地にぞくぞく移転してきます。その臨海部において、火力発電所の建設を巡り、建設業界が、日本最大といわれる大喧嘩をやらかしてしまいます。その背景と顛末を紹介しましょう。

当時、旺盛な電力需要に応えるため、多くの電力会社が、競争していました。関東では、日本初の電力会社「東京電燈」（注1）が、震災後、3ヶ月で復旧を成し遂げ、さらに電力需要を取り込もうと、隅田川沿いに千住火力発電所の建設に着工します。

一方、関東進出の好機と考えた松永安左エ門（当時、東邦電力副社長 注2）は、震災で経営難に陥った電力会社を救済して「東京電力」（現在の東京電力とは別会社）を興し、川崎市の臨海部に鶴見火力発電所（注3）を建設することになります。

「東京電力」は、早期に火力発電所を建設するため、1925年（大正14）、基礎と建屋に分けて分離発注を行い、基礎工事を間組（現ハザマ：注4）が、建屋工事を清水組（現清水建設）が落札します。

当時の慣行では、基礎工事を完成させた間組が、清水組へ現場を譲るはずでした。しかし、間組の下請は、基礎工事が完成したにもかかわらず現場を占拠し、測量に着手した清水組の測量小屋を東京湾へ投棄します。

こうして、両者の下請けは、戦いに備えつつ不穏な睨み合いを続け、鶴見警察署と川崎警察署が監視を強めます。そして、清水組の下請である青山組は、万難を排して12月20日に鍬入れ（着工式）を強行しようとしませんが、鶴見警察署の要請を受け延期します。

しかし翌21日、横浜から青山組を応援しようとタクシーで駆けつけたグループが、間違えて間組の下請けだった三谷秀組の事務所近くに行ってしまう、タクシーから引きづり降ろされ、斬られて1名が死亡してしまいます。

これがきっかけで、青山組勢は、潮田一帯に敷かれていた警察の非常線をかき

くぐり、三谷秀組の事務所に向け進行します。そこで、待ち受けていた三谷秀組勢と遭遇し、総勢2000人が激突する市街戦となりました。

各地から賭博連中やとび職が応援に駆けつけており、刀はもちろん大砲まで繰り出しての大乱闘でした。それは、午後3時から夜9時半頃までおよび、最後は、青山組勢が三谷秀組の事務所看板を奪ったことで終息しました。多数の死傷者（死亡5名）が出たことは言うまでもありません。

この事件で、一度に500人以上が検挙され、騒擾（そうじょう）罪（現在の騒乱罪）で起訴されたため、鶴見騒擾事件とも呼ばれています。建設業界が、近代技術を駆使して大震災の復興事業に携わる一方で、前近代的体質から脱皮する過程で起こった惨劇でした。

なお、土木史では、事件の1年前の1924年（大正13）に、水力発電専用の大井ダムが木曽川に完成しています。そのダム高は50mを超え、当時東洋一の規模でした。以降、大規模ダムが建造されていくという画期でもありました。

「東京電燈」と「東京電力」は、事件の3年後の1928年（昭和3）に合併しています。

注1：「東京電燈」は、1887（明治20）から石炭火力により発電送電した会社（水土の豆知識209）。関東大震災では、甚大な被害を受けましたが、翌年2月には8割以上復旧しています。また、震災後急増した電力需要に対応するため、隅田川沿いに千住火力発電所（4本のお化け煙突で有名）の建設も開始し、1929年（昭和4年）に完成しています。

注2：松永安左エ門（生没年：1875 - 1971年）は、「電力の鬼」と称され、戦時中の電力事業国家統制を嫌い、戦後の民間主体の電力事業体制を作った人です。当時、「東邦電力」（この系列のガス事業が、現在の東邦ガス）の副社長でした。東京へ進出するため、「早川電力」（電力供給地域は、静岡、横浜、東京）と「群馬電力」を合併させ、「東京電力」を設立。東京地域の電力事業の拡大に乗り出し、鶴見火力発電所を建設します。

注3：鶴見火力発電所は、合併後東京火力発電所と改称し、石炭を使用していましたが、1940年に廃止。隣接して、重油（当初は石炭）を使用した火力発電所が建設されましたが、これも順次廃止され、現在は工場団地となっています。

注4：間組は、九州の鉄道工事の請負から始まった会社。南海鉄道工事の請負で本州へ進出、その後、日清日露戦争を経て、朝鮮、満州の工事を次々請け負いました。東京に本店を移したのが、1917年（大正6）のこと。鶴見火力発電所の建設が、東京・横浜で請け負った初の仕事でした。

写真は、①鶴見騒擾事件の関連位置図（今昔マップに、「鶴見騒擾事件百科」サトウマコト著を参考に細見が加筆）、②鶴見火力発電所沿革（大川町駅前公園にある発電所跡石碑の裏面、Wikipedia 掲載写真）③当時の電力需給（川崎市「第1回企業の歴史と産業遺産」HP 掲載図）

①





②



③

